

報告 1 : 土田哲夫 (中央大学)

中国国民党の留ソ派とその活動

1920年代の中国では広範な青年がソ連に関心を持ち、特に1925～27年には中国国民党とソ連との協力関係を背景に多数の青年国民党員がソ連に留学した。もちろん、当時は国共合作中であり、国民党員の中には中共系活動家も相当数含まれていたが、留学を終えて帰国した後も国民党員として政治活動を続けた者、あるいは帰国後、中共から転向して国民党系に加わったものも少なくない。彼らは、南京政府時期の国民党政権において、ソ連留学の経験を持つ「俄国通」(ロシア通)として結集し、留俄同学会という組織を作り、中ソ関係とソ連事情を中心とする言論活動を行った。彼らを国民党内のソ連留学派(留ソ派と略称)と呼ぶことも可能であろう。

「留ソ派」というと、中国共産党内の、コミンテルンの権威を背景に一時勢威を振るった王明・秦邦憲らのグループが著名であるが、国民党の留ソ派は、ソ連留学という経歴が所属する政治集団において持った意味及び政治的権威との関係において、中共のカウンターパートとは異なった。彼らは留学によって背景的権威を得るどころか、多くはむしろ「赤化」の嫌疑をかけられ、また国民党内での派閥的基盤が欠けていたため、相互に結合し、反共を前面に出しつつも、留学で得たロシア・ソ連に関する知識を中国の現状と将来に生かそうとして、政治活動、言論活動を行ったのだった。

本報告では、国民党留ソ派の形成とその帰国後の政治活動、外交評論活動について、基本的な事実関係を明らかにすることを第一の課題とする。その上で、ロシア革命以来のソ連要因が中国国民党政権に与えた影響、近代中国における外交世論と対外専門家集団の意味などについても、議論を広げることができればと考える。